

News Letter

奈良女子大学 大和・紀伊半島学研究所

三郷町×大和・紀伊半島学研究所 連携シンポジウムの報告 【寺岡 伸悟】

10月に生駒郡三郷町にて、三郷町との共催で行った『総合流域学』に基づくリカレント教育プログラム（詳細は後述。）では現地学習という形式で行いましたので、このシンポジウムでは座学による総合流域学という目的を持って開催しました。シンポジウムは三郷町文化センター文化ホールを主会場として、奈良女子大学奈良カレッジ交流テラスをサテライト会場として、Zoomで接続して行う形式で行いました。三郷町会場に参加して頂いた方は約60名、オンライン会場である奈良女子大学会場に参加して頂いた方は7名でした。

シンポジウムは寺岡大和・紀伊半島学研究所長の挨拶から始まり、4名の講演と総合討論・質疑応答を行いました。木谷三郷町長には最後の挨拶のみならず、質疑応答にも参加していただき感謝申し上げます。

【プログラム】

開会挨拶 寺岡 伸悟（大和・紀伊半島学研究所長）

講演 「大和川流域の地形と自然環境を診る」

高田 将志（奈良女子大学長）

講演 「大和川流域の聖地一風の神・龍田一」

長田 明日華（奈良女子大学 古代学・聖地学研究センター 協力研究員）

講演 「水の神様をお祀りする廣瀬大社について」

樋口 俊夫（河合町廣瀬大社 宮司）

講演 「大和川流域における防災と

治水の取り組み」

細川 晋（大和川河川事務所長）

総合討論・質疑応答

閉会挨拶 木谷 慎一郎（三郷町長）



TOPICS

- ・三郷町×大和・紀伊半島学研究所
連携シンポジウムの報告
- ・連携シンポジウム参加者からの報告
- ・令和6年度 リカレント教育プログラム報告
- ・ヤマキイサロンの報告
- ・なら学研究活動報告Ⅰ（なら）
- ・なら学研究活動報告Ⅱ（なら）
- ・第4回聖地学シンポジウムの報告（古代）
- ・第20回若手研究者支援プログラムの
報告（古代）
- ・北九州市立いのちのたび博物館特別展
「お菓子のむかしばなし展」
関連シンポジウム「古代の菓子を考える」（古代）
- ・2024年度 東吉野村野外体験実習 報告（共生）
- ・第26回共生科学研究センターシンポジウム
「サステナブルな社会を目指して」報告（共生）
- ・第25回共生科学研究センター
シンポジウム報告（共生）

連携シンポジウム参加者からの報告 【遠藤 優海帆】

令和6年度 三郷町×大和・紀伊半島学研究所連携シンポジウム「大和川から見る総合流域学の試み～大和川風と水を治める～」を拝聴しました。

本シンポジウムでは、奈良盆地及び大和川流域における地形の性質と特徴、古代における龍田・廣瀬の神の祭祀、廣瀬神社の来歴と祭事、現代の大和川流域における防災・治水事業について、各専門分野の視点に立ったご講演が行われました。各ご講演を聴くことにより、古代から現在に至る大和川流域の地形や歴史の特徴を総合的に知ることができました。

例えば、奈良盆地が古代国家の中心となった背景に大和川の水運があり、また古代から降水量が少なかった奈良盆地では平安時代～江戸時代にため池や横井戸といった種々の水不足対策が見られました。そのように古代国家の中心であった奈良盆地及び大和川流域の地形的特徴が、大和川流域に位置する龍田・廣瀬に風の神・水の神が祀られたことにも関わっていたようです。また、大和川流域の地形的特徴と歴史が、廣瀬の神を祀る廣瀬神社の信仰を生じました。その廣瀬神社の信仰の来歴については、神祇令・四時祭に規定された年2回の祭事が南北朝時代に断絶し、江戸時代に御田植え祭に変化した後、砂かけ祭となって現代に至るそうです。

以上は、現代の目から大和川流域の歴史を振り返るものですが、また同時に現代を生きる私達が、大和川流域の防災や治水について考える契機にもなります。廣瀬神社は河川が合流する場所、人が住む場所より低い場所に建てられています。そのため、阪神淡路大震災後の調査により、社殿を築く基礎が貧弱であったことが発覚し、現在の社殿には対策が講じられています。また、大和川流域では、昭和6～7年、同42年の亀の瀬地すべりをうけて、昭和37年から現在まで地すべり対策事業が継続されています。加えて、大和川河川事務所の防災・治水事業の中には、地すべり対策インフラツーリズムという特徴的な取り組みがあり、実際の地すべりの現場を体感できる場所として、旧大阪鉄道亀瀬隧道が一般公開されています。この他、本シンポジウムでは、地震への防災対策として、地震調査研究推進本部や国土地理院が発信している情報を確認することも紹介されました。

以上のように本シンポジウムは、大和川流域を基点として、大和川流域の地形や歴史の特徴を振り返り、その上で大和川流域の現状を知り、そして未来の防災に活かすというものであり、拝聴していると、さながら河川の流れを観察しているかのような感じでした。「総合流域学」という新たな学問の風に触れることができたように感じました。

令和6年度 リカレント教育プログラム報告 【寺岡 伸悟】

令和6(2024)年10月5日(土)、奈良県三郷町にて、本研究所と三郷町共催による、『総合流域学』に基づくリカレント教育プログラムが開催されました。

このプログラムは、大和・紀伊半島を、それぞれ独自の歴史・自然・社会環境を有する河川流域の集積空間と捉え、流域を分析単位とし、3センターの専門性を活かしつつ、その連関、ダイナミズムを流域から読み解き、地域を総合的に解明し、その成果を社会還元する「総合流域学」の社会人向け現地授業です。

昨年度、東吉野村で第1回を開始し、その有効性を確認したため、第2回目を、大和川流域で開催することとなりました。

三郷町は、奈良盆地の河川が合流し大和川となり、盆地外（大阪側）へと流れ行く地点に立地しています。県境は、亀の瀬という名称で知られる地すべり地帯があり、災害を食い止めるために国を上げての取り組みが行われてきました。三郷町では、そうした取り組みと共同しながら、川を意識したまちづくりに取り組んでおり、大和川流域における総合流域学学習の適地です。

授業は、三郷町図書館会議室において、「大和川の歴史と自然」と題して、三郷町ものづくり振興課の大塚氏が概論を講じたあと、受講生はバスで龍田大社に移動しました。龍田大社は、風を治める神をまつるお社としても知られており、たしかにその立地は、



盆地内の風の流れと深い関係にあることを龍田大社の稲熊禰宜が地図を示しながら講じてくださいました。

龍田大社からふたたびバスに乗り込んだ一同は、亀の瀬地すべり歴史資料室へと移動しました。ここは、上述のように国土交通省が地すべり対策を行っている現地に建てられた資料室です。大和川河川事務所の田尻建設専門官が、資料室を案内しながら、亀の瀬と災害、そしてその対策の歴史、治水の意義を講じてくださいました。

3つの学習を終えた一同はふたたびバスで、三郷町図書館に戻り、そこで3センター長が司会をしつつ総合討論、質疑応答を行いました。参加者からは、河川に軸に近隣の様々な場所やモノを連関させて捉えることの重要性・魅力がわかったという意見が出ました。それはまた、総合流域学の重要性や魅力をあらためて確認することができた機会ともなったと思います。

最後に、プログラムの最初から終了まで、三郷町長がご参加くださったことを感謝とともに記しておきます。



ヤマキイサロンの報告

○「木」の回 【酒井 敦】

6月18日(火)16:30～18:00、奈良カレッジズ交流テラスにおいて対面とオンラインとのハイブリッド形式にて開催しました。

西村 雄一郎氏(なら学研究センター・本学教授)の「十津川村の林業と暮らしの70年」という講演では、十津川村の林業(山仕事)を中心とした暮らしのあり方が戦後70年でどのように変化したのかについてお話があり、文化としての「やましごと」の衰退や建設業(土木=災害復旧)へのシフトの一方で芽生え始めている「林業の6次産業化」や「森林ツーリズム」などの取り組みについて紹介がありました。

藤平 眞紀子氏(共生科学研究センター・本学教授)の「木材のイメージと木材の質感」という講演では、木材のイメージや質感を活かして、木材を適切に使い、快適な生活環境を整えていく方法についてお話しがあり、本学学部学生に対するアンケート調査の結果も踏まえて、「木材への親しみを増す」、あるいは「木材の利用を促進する」方策についてのさまざまな考察と提案がなされました。

参加者は対面参加者とオンライン参加者を合わせて10名でした。

○「食品」の回 【奥村 和美】

9月26日(木)16:30～18:00、奈良カレッジズ交流テラスにおいて対面とオンラインとのハイブリッド形式にて開催しました。

前川 佳代氏(古代学・聖地学研究センター協力研究員)の「歴史を食べる古代スイーツ」という講演では、古代菓子の歴史的変遷について史料や文学作品をもとに詳しく説明され、さらにそれらを現在入手できる材料で作った古代スイーツが紹介されました。また、ツタから作る古代甘味料の甘葛煎研究とその商品化についても紹介され、参加者で味見を行いました。

高村 仁知氏(共生科学研究センター・本学教授)の「日本食発祥の地・奈良の食をさぐる」という講演では、古代、日本の中心地であり、シルクロードの終着点でもあった奈良が、日本食の発祥の地でもあったことから、奈良の食材や伝統食品について、地域ごとの多彩な産物が紹介され、日本の豊かな食文化を現在に至るまで支えてきたことがわかりやすく説明されました。

参加者は対面参加者とオンライン参加者を合わせて29名でした。



○「書簡」の回 【狩俣 順也】

2月20日(木)16:30～18:00、奈良カレッジ交流テラスにおいて対面とオンラインとのハイブリッド形式にて開催しました。

講演者に共通する「書簡」をテーマで、奥村 和美氏（古代学・聖地学研究センター・本学教授）は「上代びとと書儀・書簡」という題で上代から平安時代初めにかけての中国の書簡やその模範文例集がどのように受容されてきたかについて『萬葉集』を中心に講演されました。磯部 敦氏（なら学研究センター・本学教授）は「前登志夫と書簡」という題で、吉野の山人とも称される前登志夫について書簡をとおして見えてくる前の作詩作歌営為について講演されました。お二人の講演の後に参加者とともに総合討論を行いました。

参加者は対面参加者とオンライン参加者を合わせて16名でした。

なら

なら学研究活動報告Ⅰ 【磯部 敦】

■下北山村教育委員会との共同研究

昨年度に引き続き、下北山村教育委員会と共同で「下北山村歴史民俗資料館所蔵資料の整理と活用についての共同研究」をおこなっています。奈良女子大学より磯部 敦と寺岡 伸悟、下北山村より教育委員会の山本 晃次郎氏と、地域おこし協力隊で下北山村歴史民俗資料館勤務の松村 奏子氏の4名で組織されています。

今年度のアルバイト学生は6名でした。奈良女子大学なら学研究センターにて下北山歴史民俗資料館所蔵上桑原区有文書の撮影と整理、書誌入力を行なっているほか、9月と2月には学生らとともに同館に出張しての実地調査を行ないました。

■田原資料撮影整理作業

田原地区公民館から昭和戦前期にける青年団誌『月刊田原』等を拝借し、撮影を行ないました。3月には田原地区公民館で報告会を行ないました。

■花岡大学資料

なら学研究センター紀要『なら学研究報告』12号（2024年8月刊）に、磯部 敦ほか「【資料紹介】花岡大学宛前 登志夫書簡（1）1950年1月～1955年9月、「前登志晃」時代の書簡」と題し、大淀町佐名伝所在浄迎寺所蔵花岡大学宛書簡を紹介しました。下市町の詩人・歌人である前 登志晃（前 登志夫）が花岡をロールモデルとして仰いでいることがうかがえる、興味深い書簡群です。磯部の大学院演習での成果報告も兼ねています。

■前登志夫資料

前家が所蔵する資料より、前 登志夫自筆ノートや日記の撮影を行ないました。前の短歌の生成過程、歌人や編集者らとのつながりが把握できる、興味深い資料です。



下北山での資料撮影



田原公民館で資料返却と
打ち合わせ



前 登志夫資料

なら

なら学研究活動報告Ⅱ 【水垣 源太郎】

2024 年度は 3 件の共同研究を実施しています。2021 年度から継続している下北山村との共同研究は「下北山村における観光政策・計画の効果評価」および高取町社会福祉協議会との共同研究「高齢化するコミュニティの課題解決に向けたコミュニティ・ネットワークの構築」、今年度から始まった東吉野村との共同研究「持続的コミュニティのための他出者調査」です。

下北山村との共同研究について、2023 年度の共同研究「下北山村の人口動態と人口推計」では、2025 年度から実施する「下北山村地方創生総合戦略」改訂版策定に向けて、一般的な将来人口推計モデルの検討、下北山村の実情に合った人口推計モデルの選択と人口目標の設定を行いました。これは 2022 年度までに実施した住基レベルの人口移動分析、医療福祉関係者など村内キーパーソンへのインタビュー調査、下北山村出身の他出者を対象としたソーシャル・サポート調査を踏まえたものです。2024 年度は、2023 年度の成果に基づいて、今後の中心施策の一つとなる交流人口の増加と観光インフラ整備に焦点を絞り、利用者へのアンケート調査およびインタビュー調査に基づく観光政策の効果評価を行いました。

高取町社協との共同研究では、2023 年度までに行った 3 地区での住民調査・他出者調査およびワークショップの成果を踏まえ、コミュニティ間ネットワークの構築を行っています。2023 年度末には地域が抱える生活課題（買い物支援、ひきこもりの人の”はたらく”場づくり、ボランティア参加の仕掛けづくり）を企業関係者に考えてもらう「地域課題型リカレント研修」を実施しました。また多世代交流と地区間交流の仕掛けづくりとし 2022 年度に導入した軽スポーツ（ポッチャ）の普及と実装を高取町社会福祉協議会に引き継いでおり、新たに 2 地区に定着しています。2024 年度はこれらの成果を全町に展開する足掛かりとして、全地区が共同で実施する交流イベントに参与する予定です。

東吉野村との共同研究では、「地方創生総合戦略」の改訂版策定に向けて、東吉野村出身の他出者を対象とした調査を実施しています。本調査では実家へのソーシャル・サポート、将来の帰郷や資産管理に関する項目を調査し、2020 年度に実施した住民調査の成果とも総合しながら、今後の地域総合戦略に資する新たな政策的インプケーションを得たいと考えています。



下北山村利用者ニーズ調査の様子

古代

第 4 回聖地学シンポジウムの報告 【村上 麻佑子】

2023 年度聖地学シンポジウムを、2024 年 3 月 20 日（水）に対面形式にて開催しました。

テーマは「聖地・神仏・認知」です。日本古代の「神仏」観念は中世に至るまでに大きく変化したことが明らかになっており、この点からすると「神仏」に付随する「聖」観念も、本来的なものではなく歴史的なものと捉えられます。この問題について《認知拡張仮説》という、これまで歴史学の俎上に上ったことのない分析視角、具体的には文字の「認知」とその拡張の観点から考えていきました。参加者は 70 名でした。



日 時 令和 6 年 3 月 20 日（水）13 時～16 時

講 演 神仏と人の聖なるもの—日本史における認知歴史学の可能性—

講 師：奈良女子大学 教授 西谷地 晴美

講 演 神観念の変遷—熊野信仰を例として—

講 師：奈良女子大学 特任助教 齊藤 恵美

コメンテーター：奈良女子大学 准教授 村上 麻佑子

古代 第 20 回若手研究者支援プログラムの報告 【奥村 和美】

2024 年度第 20 回「若手研究者支援プログラム」を、8 月 26 日（月）、奈良女子大学において対面形式で開催しました。科学研究費基盤研究 B「平安期における古代漢文学の質的変容解明にむけた空海作品からのアプローチ」（代表：筑波大学 谷口 孝介）・同基盤研究 C「歌における説話的意匠の形成」（代表：淑徳大学 白井 伊津子）・同基盤研究 C「中国初学書・実用書の受容実態から解明する後期萬葉和歌の特質」（代表：奈良女子大学 奥村 和美）より共催を得ました。

今回のテーマは「辞書と類書」です。辞書や類書が、当初中国でそれらが必要とされ成立するにいたる経緯と、やがて日本にもたらされ古代日本文学に受容されていった実態、及び日本語・日本文学の知の枠組みの形成に与えた影響の諸相について学ぶことを目的としました。日本国語学分野では尾山 慎氏、中国文学分野では大淵 貴之氏、日中文化交流史の分野では池田 昌広氏に講師をお願いし、各専門の立場から辞書や類書をめぐる諸問題についてお話いただきました。なお、各講演の後に、あらかじめ指名した若手研究者数名に質問をしていただき、質疑応答を通してさらに考察を深めました。65 名参加でした。



日 時 令和 6 年 8 月 26 日（月）11 時～17 時

講 演 和語・漢語・字音語－語彙論と表記論のはざま－

講 師：奈良女子大学 准教授 尾山 慎

『藝文類聚』の編纂経緯及び現存テキストの注意点について

講 師：鹿児島大学 准教授 大淵 貴之

日本人と類書

講 師：京都産業大学 教授 池田 昌広

司 会：奈良女子大学 教授 奥村 和美

古代 北九州市立いのちのたび博物館特別展**「お菓子のむかしばなし展」関連シンポジウム「古代の菓子を考える」【前川 佳代】**

10 月 19 日土曜日に、シンポジウム「古代の菓子を考える」を北九州市立自然史・歴史博物館ガイド館で開催させていただきました。主催は、科学研究費補助金基盤研究（C）「日本古代の飲食・供膳様式の解明と菓子再現活用の研究－東アジアの食膳研究その 2」課題番号：22K02159、研究代表者：奈良女子大学大和・紀伊半島学研究所古代学・聖地学研究センター 協力研究員 前川 佳代）で、共催は「お菓子のむかしばなし展」実行委員会、北九州市立自然史・歴史博物館歴史友の会と奈良女子大学大和・紀伊半島学研究所古代学・聖地学研究センターです。当日は荒天にもかかわらず、65 名の参加者がありました。

本シンポジウムは、会場となったいのちの旅博物館で 10 月 12 日から 12 月 8 日まで秋の特別展「お菓子のむかしばなし展」が催され、本学で 2011 年から再現している古代甘味料の甘葛煎の展示や、前川の古代菓子科研の成果が一部展示協力させていただいていること、そして博物館の宮元 香織学芸員（本学大学院博士課程 2006 年修了）が科研共同研究者であることから実現されたものです。古代の菓子について、古墳時代から中世までを対象として考古学、古代史、中世史、中世宗教史それぞれの専門研究の立場からその実態に迫ろうとしました。

まず基調講演として前川が「古代の美味しいお菓子と食文化」と題してこれまでの研究の成果を総括したあと、4 人が関連報告をしました。宮元氏は古墳時代の考古学を専門とする立場から「古墳出土の餅状土製品について」、薬師寺宝物管理研究所研究員でセンター協力研究員の宍戸 香美氏は古代史から「奈良時代の儀式で使われたお菓子」、同じく協力研究員の森 由紀恵氏は中世宗教史から「清浄歓喜団－「美物」のお供え物－」、

奈良文化財研究所アソシエイトフェローで本学大学院博士研究員の土居 規美氏は古代・中世考古学から「菓子と器―福岡と奈良をつなぐ土器―」をそれぞれ報告しました。

その後、前川が司会でミニシンポジウム「古代の菓子を考える」に移りました。日本古代に菓子は「くだもの」「このみ」と呼ばれ果実を指すように思われますが、なかには草の実や水生植物の実なども含まれ、古代の甘味料である甘葛煎も菓子と称されました。これに加えて、加工菓子（餅類）も存在していました。それらの一部は神饌や仏供として今に知られています。加工菓子は唐菓子に代表されるように、遣唐使が大陸から持ち込んだと考えられていますが、古墳時代にも奈良時代や平安時代の加工菓子に似た土製品が出土しており、すでに日本のなかでも加工菓子が作られていて、文字として記録が残る奈良時代以降に、大陸からきた菓子と混在していった可能性が示されました。そして古代の菓子が清浄歓喜団のように、1300年続いて現在にもお供え物として残っているのは、心をこめてこの国の「美物」＝美味しいものを作りお供えするという気持ちがあったからではないか、菓子だけでなくお供えするための行事や作法も含めて伝えなければならないという使命感もあったのではと、菓子の実態にとどまらず、菓子を作り提供し伝えてきた古代の人々の思いにまで話が及びました。会場からも多くの質問をいただき、大変有意義なシンポジウムでした。開催にご尽力してくださった関係機関のみなさまには篤く御礼いたします。



展示担当学芸員と科研メンバー



シンポジウムの様子

共生

2024 年度 東吉野村野外体験実習 報告 【酒井 敦・鎌倉 史帆】

今年度第1回目の野外体験実習を、2024年7月27日（土）に東吉野村で行いました。今年は小中学生8名、保護者8名、奈良女子大学からスタッフ6名（学生2名含む）、東吉野村で「菌ちゃん農法」による野菜栽培に取り組んでおられる講師の岡島さんをはじめとする現地スタッフの方々3名を加え、総勢25名で実習を行いました。はじめに大和・紀伊半島学研究所分室（旧四郷小学校）にてミニ講義を行い、植物の育ち方や土の中の微生物のはたらきについて学習し、微生物の力を利用した野菜の育成法である「菌ちゃん農法」についての解説をしました。現地スタッフの寸劇による追加説明もあって、参加者からは、“畑の中でも「菌」が活躍しているとしてますます興味がわきました”といった声が聞かれました。次にマイクロバスで体験の場となる農場「おかちゃんファーム」に移動し、「菌ちゃん農法」で育てた野菜の収穫や試食、畑の土の中にいる「菌」に「エサ」となる枯草を与える



野菜収穫の様子



講義の様子

作業などを行いました。暑い日でしたので全体を二つの班に分け、日向の畑でニンジンや枝豆、ズッキーニやミニトマト、ナスなどいろいろな野菜を収穫する作業と、テントの日よけの下でのミニ講義「野菜の栄養」を交代で行いました。作業や講義の合間には、川で冷やしたスイカ、バーベキューコンロで焼いたトウモロコシ、それに生のピーマンを使った“ピーマンの肉詰め”を食べ、おなかもいっぱいになりました。畑を去る直前には講師の岡島さんに野菜栽培についてのいろいろな質問に答えていただきました。参加者からは“ピーマンが苦くなかったのにびっくりでした”“とても楽しく勉強できました”といった声が聞かれました。再びマイクロバスで分室に移動し、「野菜の調理法」に関するミニ講義を行い、今日の振り返りをし、アンケートに答えていただきました。アンケートの結果では、この「野菜の調理法」に関する講義が“とてもためになった”“誰かに教えてあげたくなった”ととても高く評価されていました。

2 回目の実習は、8月9日（金）、小学生 15 名、中学生 1 名、保護者 10 名の方々にご参加いただき、奈良女子大学のスタッフ 11 名を加えた総勢 37 名で行いました。今回は、河川の藻類の採集や顕微鏡観察を通じて、川の環境について学ぶことをテーマとしました。まずは、東吉野村分室にて、川にすむ藻類、とくに多くみられる珪藻という生き物について紹介するミニ講義を行いました。珪藻は、細胞がガラスの殻でおおわれている 0.01~0.5 mm くらいの大きさの藻類です。殻の形はさまざまで、コメツブケイソウやクチビルケイソウなど、その見た目の特徴から名付けられた珪藻が多くあります。ミニ講義の中でいくつか殻の写真を出し、その珪藻の名前を予想してもらったところ、ブーメランケイソウやすべり台ケイソウなど、自由でおもしろい意見が挙がりました。また、珪藻をはじめとして小さな藻類は世界中の水圏に生育していて、水中のいろいろな生き物のえさとして重要であることも学びました。続いて、ライフジャケットを着装し、四郷川へ採集に出かけました。川の中のヌルヌルしている石や、茶色っぽくなっている石、小さな泡（光合成で出た酸素の泡）がついている石には、珪藻がたくさんついています。川の中を歩き、色々な石を見て、触って、参加者それぞれが選んだイチオシの石から、歯ブラシを使って藻類を採集しました。また、石のかげや表面に水生昆虫がたくさん住んでいることを発見し、それぞれの昆虫の特徴や食べているものについても学びました。オタマジャクシや小さな魚、カニなども見つかり、盛り上がりしました。次に、ふたたび分室にて、川で採集した藻類を顕微鏡で観察しました。参加者は自分で採った試料を自分で観察することに新鮮な楽しさを感じているようでした。珪藻が活発に動くということにも驚きがあったようです。参加者は、観察した藻類を写真に撮ったり、藻類の形や動き、色をイラストで上手に表現したりしていました。加えて、あらかじめ池で採集しておいた藻類と今回採集した川の藻類を見比べたり、大学の実験室から持ってきたボルボックスやミドリムシの観察に挑戦したり、近年日本の河川で分布を拡大している外来種ミズワタクチビルケイソウの群像を見てもらったりと、盛りだくさんな内容になりました。当日は晴天に恵まれ、川での実習を実施することができました。実習の安全にあたり、参加者の皆様のご協力に感謝いたします。また、実習後のアンケートでは多くのコメントいただきましてありがとうございました。このたびの実習が、河川の環境や生物に対する皆様のさらなる関心につながりましたら幸いです。本実習は公益財団法人河川財団による河川基金の助成を受けて実施されました。

東吉野村野外体験実習は、来年度も安全性に最大の配慮をしつつ、内容を工夫しながら実施する予定です。



川での採集の様子



顕微鏡観察の様子

第 26 回共生科学研究センターシンポジウム「サステナブルな社会を目指して」報告

【吉村 倫一】

2024 年 11 月 30 日（土）13 時より第 26 回奈良女子大学共生科学研究センターシンポジウムを開催しました。当該シンポジウムは、第 30 回紀伊半島研究会シンポジウムと共催で、テーマは「サステナブルな社会を目指して」でした。奈良女子大学・総合研究棟文学系 S 棟・2 階 235 教室での対面と Zoom によるオンラインのハイブリッド形式で開催し、参加者は、会場（対面）23 名、Zoom オンライン 26 名でした。プログラムは以下の通りです。

【プログラム】

吉村 倫一（共生科学研究センター）：司会進行

酒井 敦（共生科学研究センター長）：開会挨拶

杉山 拓次（奈良教育大学 ESD・SDGs センター）

「持続可能な社会の実現のための ESD とその実践～春日山原始林の事例から」

小寺 孝範（花王株式会社ハウスホールド研究所）

「洗剤における環境問題（水を視点にした考察）」

織田 政紀（日本ロレアル株式会社 R&I センター）

「ロレアルにおけるサステナビリティプログラム ロレアル・フォー・ザ・フューチャー」

三浦 仁美（積水化学工業株式会社 ESG 経営推進部環境経営グループ）

「積水化学グループにおける環境課題を通じたサステナブルな社会の実現を目指した取り組み」

村松 加奈子（紀伊半島研究会事務局長）：閉会挨拶

酒井 敦共生科学研究センター長の挨拶と趣旨説明につづき、最初の講演者の杉山氏は、2002 年に南アフリカ・ヨハネスブルグサミットで日本が考え方を提唱し、ユネスコを主導機関として国際的に組み込まれてきた ESD「Education for Sustainable Development：持続可能な開発のための教育」について説明があり、奈良教育大学における ESD の取り組みについて、「春日山原始林」を教材としてその実践の内容を詳細にご説明いただきました。持続可能な社会へ向けての取り組みがよくわかる講演でした。

次の講演者の小寺氏は、「洗剤」に焦点をあてたサステナブル社会の取り組みについてご紹介いただきました。洗剤は使用量が多いため環境負荷の低減が求められており、原料、生産、販売、使用、廃棄の過程で発生する炭酸ガスの量を減らすためには、使用する水の量を減らすこと、天然由来の原料を用いることなどを詳細にご説明いただきました。未来のために私たちに何ができるかを考えさせられる講演でした。

3 番目の講演者の織田氏は、気候変動、水、生物多様性、天然資源に関して、2030 年までに達成するための取り組みを科学に基づく目標を交えてご紹介いただきました。また、自然に着想を得た新しい科学の「グリーンサイエンス」の 5 つの柱（グリーン栽培、バイオテクノロジーと発酵、グリーン抽出、グリーンケミストリー、グリーン処方）についてご紹介いただき、化粧品開発の際に必要な「エコデザイン」も大変興味深い内容でした。

最後の講演者の三浦氏は、企業として環境課題解決を通じてどのようにサステナブルな社会の実現を目指すのかについてご紹介いただきました。まずは「基盤」が重要であり、さらに、ものづくりにおける取り組みや環境課題解決を加速するために「サステナビリティ貢献製品制度」の活用について詳細にご説明いただきました。住宅や自動車のガラスなど身近なものを例にご説明いただき、わかりやすい講演でした。最後に、村松 加奈子紀伊半島研

第26回 共生科学研究センターシンポジウム
第30回 紀伊半島研究会シンポジウムサステナブルな社会を
目指して

2024年

11月30日(土)

13:00~16:45

参加費：無料

会場：対面とオンラインのハイブリッド形式

(対面) 奈良女子大学 S棟2階 S235

(オンライン) Zoomによるオンライン参加

参加申し込み：右のQRコードから申し込んでください。

申し込み期限：11月27日(水)17時

<https://forms.gle/mCnsoW7prg5dp8R>

プログラム

司会進行：吉村倫一（共生科学研究センター）

13:00~13:05 酒井 敦（共生科学研究センター長）開会挨拶

13:05~13:55 杉山 拓次（奈良教育大学 ESD・SDGs センター）

「持続可能な社会の実現のためのESDとその実践～春日山原始林の事例から」

13:55~14:45 小寺 孝範（花王株式会社 ハウスホールド研究所）

「洗剤における環境問題（水を視点にした考察）」

15:00~15:50 織田 政紀（日本ロレアル株式会社 R&I センター）

「ロレアルにおけるサステナビリティプログラム ロレアル・フォー・ザ・フューチャー」

15:50~16:40 三浦 仁美（積水化学工業株式会社 ESG経営推進部 環境経営グループ）

「積水化学グループにおける環境課題を通じたサステナブルな社会の実現を
目指した取り組み」

16:40~16:45 村松 加奈子（紀伊半島研究会事務局長）閉会挨拶

お問い合わせ 主催：奈良女子大学 共生科学研究センター

メール：kyousei.nw@cc.nara-wu.ac.jp Web：<https://www.nara-wu.ac.jp/kyousei/>

研究会事務局より閉会の挨拶があり、シンポジウムを終了しました。

今回のシンポジウムでは、大学と企業のそれぞれの立場から、サステナブルな社会の実現に向けた取り組みを詳細にご紹介いただきました。普段私たちが使っている水でも考えさせられるものがあり、環境問題について勉強になったと同時に、いずれも大変興味深い講演でした。奈良女子大学共生科学研究センター運営委員会の一員として、シンポジウムの企画・運営でお世話になった皆様に、この場をお借りして深く御礼申し上げます。



質疑応答の様子

共生 第 25 回共生科学研究センターシンポジウム報告 【村松 加奈子】

第 29 回紀伊半島研究会シンポジウム・第 25 回共生科学研究センターシンポジウム・第 3 回未来共創ネットワーキングセミナーが、紀伊半島研究会主催、共生科学研究センターとなら未来共創委員会の共催にて、2024 年 10 月 20 日（日）13:00～17:00 に奈良女子大学 G 棟 1 階 G101 教室の対面とオンラインのハイブリッドで開催され、46 名の参加がありました。

前迫 ゆり紀伊半島研究会会長の開会挨拶に続いて、林 礼美氏（地球環境産業技術研究機構）からは、カーボンニュートラルシナリオとエネルギー・食料について、世界モデルによる分析結果からの知見について、伊崎 昌伸氏（奈良国立大学機構・奈良女子大学）からは、自然エネルギー技術、特に太陽電池と水素製造についてお話しいただきました。渡会 英明氏（神戸学院大学現代社会学部）からは、ゴルフ場における炭素収支の実情とカーボンニュートラルへの取り組みについて、落合 史生氏（市民エネルギー生駒）からは、エネルギーの地産地消を目指した市民エネルギー生駒の活動の紹介がありました。

最後に谷 晴子氏（大和森林管理協会・奈良ストップ温暖化の会）からは、現代版の吉野林業の実現に向けた取り組みについてお話しいただきました。森林による炭素吸収のクレジット(J-クレジット)は林業家にとってはメリットだけではなくデメリットもあるけれど、クレジットを売るだけではなく山を活用していく機会と捉えた様々な取り組みが印象的でした。総合討論では、学生からも活発に質疑応答があり、カーボンニュートラルに向けて各分野での取り組みについて学ぶ機会となりました。太陽光発電に関しては、ソーラーパネルのリサイクルについて私自身も疑問に思っていたのですが、素子部分は半永久的に利用できること、コンバータ部分は交換が必要であることが理解でき、今後のリサイクルに対する期待が持てました。また、カーボンニュートラル実現に向けた暮らしは不便になるのか、技術で解決できるのか？についても議論がありました。不便になる点もある程度は受け入れる必要があるかとは思いますが、技術で解決できる部分はその技術を正しく積極的に取り入れていきたいと思いました。



研究所の活動状況（2024 年度）

シンポジウム等

- ◎聖地学シンポジウム（古代）
日時：2024 年 3 月 20 日（水）
場所：文学系 N 棟 302 教室
テーマ：「聖地・神仏・認知」
- ◎第 20 回若手研究者支援プログラム（古代）
日時：2024 年 8 月 26 日（月）
場所：文学系 N 棟 202 教室
テーマ：「辞書と類書」
- ◎第 25 回共生科学研究センターシンポジウム（共生）
日時：2024 年 10 月 20 日（日）
場所：理学系 G 棟 101 教室
およびオンライン（ZOOM）
テーマ：「カーボン・ニュートラル
～将来に引き継ぐ地球環境とくらし～」
- ◎第 26 回共生科学研究センターシンポジウム（共生）
日時：2024 年 11 月 30 日（土）
場所：文学系 S 棟 235 教室
およびオンライン（ZOOM）
テーマ：「サステナブルな社会を目指して」
- ◎三郷町×大和・紀伊半島学研究所 連携シンポジウム
日時：2024 年 12 月 7 日（土）
場所：三郷町文化センター文化ホール
(主視聴会場)
奈良女子大学奈良カレッジ交流テラス
(副視聴会場)
テーマ：大和川から見る総合流域学の試み
～大和川 風と水を治める～

ヤマキイサロン

- ◎「木」の回
日時：2024 年 6 月 18 日（火）
場所：奈良カレッジズ 交流テラス
講演者：西村 雄一郎（なら学研究センター）
藤平 眞紀子（共生科学研究センター）
- ◎「食品」の回
日時：2024 年 9 月 26 日（木）
場所：奈良カレッジズ 交流テラス
講演者：前川 佳代
(古代学・聖地学研究センター)
高村 仁知（共生科学研究セン ター）

◎「書簡」の回

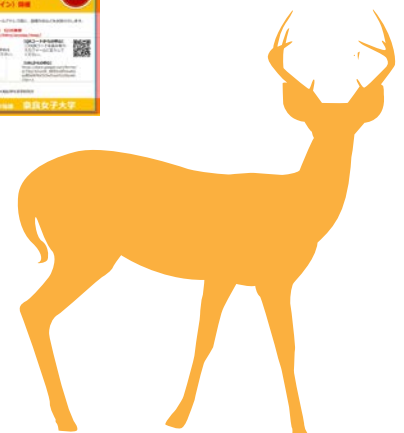
日時：2025 年 2 月 20 日（木）
場所：奈良カレッジズ 交流テラス
講演者：奥村 和美
(古代学・聖地学研究センター)
磯部 敦（なら学研究センター）

講演会

- ◎古代学・聖地学研究センター特別講演会（古代）
日時：2024 年 6 月 12 日（水）
場所：奈良カレッジズ交流テラス
およびオンライン（ZOOM）
講師：ハーバード大学教授、
エドウィン・O・ライシャワー日本研究所所長
栗山 茂久氏
講演：時間の忘却と近代医学の誕生



- ◎第 34 回南方熊楠賞受賞記念講演会
(大学主催、研究所共催)
日時：2024 年 12 月 15 日（日）
場所：文学系 S 棟 235 教室およびオンライン
講師：奈良女子大学名誉教授
松岡 悦子氏
講演：妊娠・出産でつながる人と社会



地域連携事業

- ◎小中学生対象「東吉野村野外体験実習(7月)」(共生)
日時：2024年7月27日(土)
場所：東吉野村
- ◎小中学生対象「東吉野村野外体験実習(8月)」(共生)
日時：2024年8月9日(金)
場所：東吉野村



- ◎ヤマキイサロンなら学研究会
日時：2025年3月16日(日)(予定)
場所：田原公民館
テーマ：学生が語る「田原村」
～「月刊田原」を読み解く～

リカレント教育

- ◎『総合流域学』に基づくリカレント教育プログラム
日時：2024年10月5日(土)
科目内容：大和川・龍田大社の歴史
大和川の自然
三郷町の近現代
場所：三郷町図書館
龍田大社
亀の瀬地すべり歴史資料室
講師：三郷町 大塚 慎也課長補佐
龍田大社 稲熊 憲彦禰宜
大和川河川事務所 田尻 一朗建設専門官



センター主催セミナー

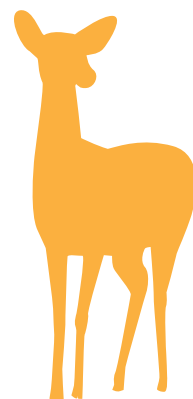
- ◎2024年度第1回(通算35回)
共生科学研究センターセミナー(共生)
日時：2024年8月1日(木)
場所：理学系A棟205教室(関係者限定)
講演：「総合流域学について」
寺岡 伸悟(大和・紀伊半島学研究所長)
- ◎2024年度第2回(通算36回)
共生科学研究センターセミナー(共生)
日時：2025年3月13日(木)(予定)
場所：理学系A棟201教室(関係者限定)
講演：「共生科学研究センターのレジェンド研究
ー紀伊半島の河川と流域環境」
和田 恵次氏(奈良女子大学名誉教授・
元共生科学研究センター長)

センター共催セミナー

- ◎第5回未来共創ネットワーキングセミナー(共生)
日時：2024年12月26日(木)
場所：理学系G棟302教室
およびオンライン(ZOOM)
テーマ：「COP29 派遣報告
～ユースから見た国際会議と
気候変動問題のゆくえ～」
和田 優希氏
(奈良女子大学理学部環境科学コース4回生)
コーディネーター・司会：村松 加奈子
(奈良女子大学)
コメンテーター：久慈 誠(奈良女子大学)

開講科目

- ◎共生科学(共生)
- ◎共生科学セミナー(共生)
- ◎共生科学特別演習(共生)
- ◎古代学・聖地学特別演習B(古代)
- ◎古代学・聖地学セミナーB(古代)
- ◎なら学(なら)



編集後記

2024(令和6)年度のニューズレターをお届けします。研究所では昨年度は試験的なリカレント教育でしたが、今年度から正式にリカレント教育プログラムを開始することが出来ました。座学のみならず現地まで赴きさまざまな分野の専門家から話を聞くことで総合的な学問を学べるようになっていきます。またヤマキイサロンを開催するなど、研究所内に3センターが存在しているからこそ出来る文理融合的なつながりを進めることが出来ました。これからも研究所でこのような研究活動が発展することを期待しています。(狩俣)

制作発行者 奈良女子大学 大和・紀伊半島学研究所
編集者 狩俣 順也 川根 昌子
槌谷 けい子
連絡先 〒630-8506 奈良市北魚屋東町
Tel 0742-20-3762
担当事務 研究協力課
URL <http://www.nara-wu.ac.jp/kyi>
e-mail ky-i@cc.nara-wu.ac.jp